

二〇二四年三月八日

菜の花を揺らす腕白雀かな
星空をよぎり飛機の灯冴返る
斑雪野となりし朝に鴨さわぐ

かえる
みきえ
むべ

二〇二四年三月七日

古の彩のゆかしき土雛
春日燦紵の森の小流れに
春風を讚美して揺るビオラかな
百鉢の芽吹きを朝な存問す
子らの描く絵雛口開け大笑ひ
あえかなる初花と見し一二輪

澄子
わかば
あひる
うつき
なつき
もとこ

二〇二四年三月六日

日時計が待合せ場所春麗ら
堰落ちて逸る瀬波に風光る
春光を撒く激つ瀬の飛沫かな
クレソンに水ゆき渡る川辺かな
里人に笑ひ初めたる四方の山
うち仰ぐ白亜の天守風光る
春泥の径に敷かれし藁筵

せいじ
康子
康子
澄子
やよい
せいじ
むべ

二〇二四年三月五日

春光や堰落つ水の高鳴りて
嫁と手をつなぎ春野の下り坂
そぼ降れる雨に末黒野匂ひけり
春しぐれま青な空を置土産
芽柳や蕩々として濠の水
落椿勤王志士の碑ほとりに

やよい
たか子
千鶴
明日香
せいじ
こすもす

二〇二四年三月四日

水に映ゆ岸辺の河津桜かな

わかば

二〇二四年三月三日

春光やどこまで伸びる飛行雲
大股の靴跡残る春の泥
忽然と向きかへ野火の迫りくる
竹林のくいぜに溢る春の雨
子午線の城に日時計風光る

みきえ
みきお
うつき
むべ
せいじ

二〇二四年三月二日

狭間より覗く城下や春うらら
玄関の雛に目細め配達夫
畝に肩出して取入れ待つ大根
のけ反りてくぐる山門梅真白
存問の絵てがみに笑む夫婦雛
踊るものつま弾くものや雛の宴
ジーパンに膝のぞかせてギャルの春
春禽のついと消えたる洞昏し
播磨灘沖行く船の灯の朧
湧水のゆらぎに任せ蝌蚪の紐
梅散らしたる狼藉は目白どち
駈けつこに疲れ寝転ぶ犬ふぐり
球児らの声高らかや芝青む
種の殻帽子に双葉出でにけり
水底に砂紋きらめく春の川
日時計の針影薄き春曇

みきえ
あひる
きよえ
なつき
うつき
あひる
満天
むべ
きよえ
澄子
むべ
うつき
みきえ
かえる
なつき
千鶴

毎日句会みのる選・二〇二四年三月一日